「通りすがりの親切な人」

時任蓮　（50 代）

私の祖母は、八十歳を過ぎた頃から少しずつ記憶のパズルのピースを失い始めた。最初のうちは昨日の晩ご飯を忘れ、やがて私の名前を忘れ、最終的には目の前にいる私が自分の孫であることすら忘れてしまった。

ある日、実家のリビングで祖母と二人きりになった時のことだ。いつもはヨレヨレのパジャマ姿が多い祖母が、その日はなぜか背筋をピンと伸ばし、ひどく恐縮した様子で私にこう言った。

「あの、どちら様でしょうか。わざわざお越しいただいたのに、お名前を失念してしまいまして……」

血の繋がりという、絶対に解けないはずの結びつきがあっけなく消えた瞬間だった。しかし、深く頭を下げる祖母の姿があまりにも丁寧で、よそ行きの上品な顔をしていたものだから、私は悲しむのを忘れてつい笑ってしまった。そして、とっさにこう返したのだ。

「あ、気にしないでください。私はただの、通りすがりの親切な者です。お茶でも飲みに寄っただけですから」

その日から、私と祖母の「新しい関係」が始まった。 私は孫という役割を失った代わりに、彼女の「一番気の合う他人」になった。祖母にとって私は、素性の知れない、けれどいつも自分の話をニコニコと聞いてくれる都合の良い若者だ。 ある午後、祖母は古い桐箱から、茶色く変色した一通の手紙を取り出してきた。それは、かつて彼女が若かった頃、元カレが戦地から送ってくれたという大切な手紙だった。

「これね、本当に大切なものなの。あの人は戻ってこられなかったけれど、ずっと私のお守りなのよ」

祖母は愛おしそうに手紙を撫で、少女のような照れた笑顔で、若き日の恋の思い出を語ってくれた。自分の娘や孫には決して見せることのなかった、一人の女性としての生身の姿がそこにあった。もし私が「孫」のままでいたら、彼女は気恥ずかしさから、この心の奥底にある引き出しを開けてはくれなかっただろう。

家族とは、お互いを知り尽くしているからこそ、時に役割を押し付け合い、窮屈になることがある。もし私が「私を忘れたおばあちゃん」を哀れみ、無理に思い出させようとしていたら、お互いに傷つけ合っていただろう。 記憶を失った祖母が教えてくれたのは、「家族の形は、生きていく中で何度でも新しく作り直していい」ということだ。

今日も私は実家のドアを開ける。

「こんにちは。また通りすがりに寄っちゃいました」

祖母は「おや、いらっしゃい」と、最高の上品な笑顔で私を迎え入れてくれる。私たちは血の繋がりを超えて、今日も新しく、心地のいい家族を始めている。